

いじめを前に

岩国市立麻里布中学校 3年 大嶽 良太



僕は生まれて初めていじめというものを目撃しました。

それは僕が公園で友達と遊んでいる時に目撃したのですが僕は友達に、

「あれ、けんかじゃない？」

と言われるまで気が付きませんでした。

そこで僕が見たのは小学校高学年くらいの男の子2人が1人をいじめている光景でした。

正確にはいじめている内の男の子1人が馬乗りになり、もう1人が後ろではや囃し立てているという状況でした。

僕と友達は少し困惑しました。

それは本当にいじめなのだろうかという事や、ここで声をかける事が正しいのだろうかなどといった不安があったからです。

何より、僕は生まれて初めて見るいじめという行為に対してどうすればいいのか分かりませんでした。

少し様子を見ていましたが、一向にやめる気配が無かったので意を決して声をかけることにしました。

僕達が近づくとはや囃し立てていじめていた1人の子が気づき、こちらを見て焦った様子でもう1人に話しかけていました。

近くで見ると、思っていたよりも激しく暴力を振るわれており、僕はなぜもう少し早く駆けつけてあげることが出来なかったのだろうかと後悔しました。

しかし、僕が一言言おうとする前に1人の成人男性が彼らの所へ行き、

「何をしている。」

といじめをしている子達に怒鳴ると、いじめていた子達はその場から逃げていきました。

何もすることが出来なかった僕は逃げていく子達を何も言わずにただ立って見ていることしか出来ませんでした。

結局、僕はあの子達が何故暴力を振るい、またいじめられていた子は何故暴力を振るわれるようなことになったのかを知ることが出来ませんでした。

僕はいじめが起きている時に何もできずに見ただけで、これではいじめていた子達と同じだなと思いました。

もっと自分にも出来ていた事があったはずだなと後悔しました。

公園内では確かに他の人達もいましたが、誰も彼らには気が付いてはいませんでした。

そんな中、僕は真っ先にいじめが起きていたことに気付いたのにも関わらず、いじめを解決するための行動を起こせませんでした。

僕に求められた中学生らしい行動とは、いじめを止めに入った成人男性のような行動であり、決してただの傍観者になることではありませんでした。

僕は今までいじめなんてしたことはなく、もちろんいじめをされたこともされている場面を目撃したこともなく、初めて見るいじめの場面に困惑しました。

ですが、それは1人の子供を助けることが出来なかった理由にも言い訳にもなりません。

僕がすべきだった行動はすぐにでも駆けつけ、事情を聴き、暴力は駄目だと注意を促すことだったのです。

そうすれば、僕がいじめを目撃してから彼らに声をかけるまでに、その子に振るわれた彼の痛みを、少しでも減らすことが出来たのではないかと思います。

僕はあの時の自分のとった行動を、悔いても悔やみきれないほど反省しました。

今まで学校の先生が、いじめを受けていた人がいたから、いじめについて考えるようにとおっしゃられた事がありました。

その時の僕はまだ、いじめが起きていたということに対しての実感がなく、自分の目で見ると、いじめをされている人の気持ちを想像することが出来ませんでした。

しかし僕は、いじめられていた子の泣いている姿を一生忘れることはないと思っています。

何故なら、それほど僕にとって、いじめられていた彼の気持ちに、同情せざるを得なかったからです。

公園で1人からは暴力を振るわれ、もう1人には助けてくれるどころか後ろで笑われ、公園内にいる大人達は気付かず止めに入ってくれる気配さえもない。

そんな状況になっている彼を見て、僕は、まだいじめられている人の気持ちを想像することが出来ないなど、絶対に口にすることがあってはならないと思ったからです。

僕はいじめについて考えるのと同時に、自分がいじめに遭遇した時にどういう行動をとるべきなのかということも考えなければいけなかったのだと、今回自分が体験をしたことから実感しました。

僕は、大人でも先生でも、ましてやヒーローでもありません。

ですが、どんな立場であろうといじめを前にすれば止めなければなりません。

たとえ相手が大人であろうとも注意するための一歩を踏み出す必要があります。

ですが、僕は小学生のいじめすらも止めに入ることができませんでした。

今まで、いじめという行いに対しての認識の甘さと想像力の欠如が、助けることができた人を前に、助けられませんでした。

どんな事も起こってからでは遅いものです。

ですが、いじめを未然に止めることは難しい。

だからこそ、起きてから一刻も早くいじめを止めるための行動をとらなければならぬと身をもって感じさせられました。

自分自身がいじめについて考え、そして、誰かのために一歩踏み出せるのか考えることこそ、いじめをなくすために必要なことだと感じました。

そして僕は、人としていじめを止めるという当たり前のことが出来るようにしていきたいと思います。